

|||||  
 卷 頭 言  
 |||||

意外性の学問 — 「非線形」



吉 川 研 一

万事が競争・競争の今日、研究も人を打ち負かし、勝利を得ることが目的であるかのように思われることもあります。一刻も早く人に先んじ、プライオリティをとる。これが研究活動の本質であるかのようです。確かに、プライオリティを重視することは研究活動の基本となっています。誰も考えつかなかったことや、誰もやりとげることができなかつたことを、初めて成し得た研究者を正当に評価する。この重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはありませんでしょう。実際、現代の学問が先人達の数えきれないほどの、膨大な血と汗の上に成り立っていることを考えると、発見の一つ一つを、きちんと位置付けることは大切です。

ところで、プライオリティを重視する立場と、「競争万能」主義的な考え方とは、明確に区別する必要があると考えられます。

「競争」中心の考え方は、例えば全ての人を100 m走といった、ある枠組の中で競わせることにつながります。10人が100 m走といった枠組の中で競争をすれば、その中で1位になり勝利を得るのは1人だけです。いわば、勝者1名に対し敗者が9名のゲームとなります。このように、枠組の中の競争は勝者が居れば、必ず多数の敗者が居ます。

研究もある枠組の中で競争していると、プライオリティをとるのは1人で、その他は敗者になってしまうこととなります。ところが、学問研究の面白さは、既存の枠組を変えると、意外なところに新しい視点や仮説が生まれることにあります。そして、歴史的にみて最も評価の高い研究は、旧来の枠組を打ち破り、新しい枠組を打ち立てるようなものであることは明らかでしょう。新しい枠組で、新しい発見をする。そこには、輝かしい勝者は居ますが、誰も敗者ではありません。このようにして学問を進められることができるものなら、何と楽しいことでしょうか。

それでは、どのようにすれば既存の学問の枠組をとり払い、新しい考え方に到達することができるのでしょうか。今回の特集号をまとめるにあたって、私はこのような問題意識の上で協力させていただきました。「非線形」の考え方、これが皆さんが新しい発想を得る上で、何らかの参考にでもなれば幸甚です。

(名古屋大学)